

た。3) 6例に滑膜生検を行い、2例で RA に一致する所見が得られた。4) RA の重複と考えられる例が3例認められたが、5) X線所見で、骨破壊の分布が限局性で、手関節のびらんを主体とし、関節炎が完解した例が2例あった。この2例は、RF は陰性から疑陽性で、滑膜生検像は非特異的慢性滑膜炎の所見であった。

結論：RA の重複と断定できない症例が存在し、PSS 自体により RA 様骨変化が生ずる可能性が考えられた。

4) 難治性 RA に対する免疫抑制剤の使用経験

羽生 忠正・田中 隆明
星野 賢一 (新潟大学整形外科)

慢性関節リウマチ (RA) の難治例に対して、われわれは、1 mg/Kg 以内の少量のシクロホスファミド (CY) またはメトトレキサート (MTX) の少量パルス療法を施行したので、その成績を報告する。

【対象】CY 使用群は12例 (女11例・男1例) で、投与開始時年齢は43歳から67歳 (平均55歳)、経過観察期間は1年から3年6カ月である。全例プレドニゾン (ス剤) 使用例であった。一方、MTX 少量パルス療法を行ったのは12例 (女9例・男3例) で、開始時年齢は34歳から71歳 (平均 53.4 歳)、経過観察期間は3カ月から3年9カ月である。ス剤使用例は8例であった。

【結果】1) CY 使用群の Lansbury index (LI) は投与開始時平均77%、6カ月58%、12カ月51%、18カ月では49%と徐々に改善を認めた。投与開始時の LI に対して50%以上の LI の改善を著効例、25%以上を有効例、それ以下を不変例と定義すると、最終調査時著効3例、有効7例、不変2例であった。また、開始時蛋白尿を5例に認めたが、4例で消失し、ス剤は9例で減量出来た。副作用による中止例はなかったが、使用中に出血性膀胱炎を疑わせる血尿、白血球減少をそれぞれ1例に認めた (一時減量)。帯状疱疹の併発の2例は、その治療中は休業させた。悪性腫瘍を誘発したと思われる症例は今のところない。2) MTX 使用群の LI は開始時77%、6カ月48%、12カ月後49%と低下を認めた。最終調査時の評価は著効2例、有効7例、不変1例、中止2例であった。副作用を起こしたのは5例で、胃および肝機能障害の2例は中止とした。

以上より、難治例に対する治療成績は両群ともほぼ同等であったが、効果の発現に関しては MTX の方が速効性であり、副作用に関しては CY の方が軽症であっ

た。すでにス剤を使用しているような症例では、MTX の少量パルス療法ばかりでなく、少量の CY の併用療法を考慮してみる価値はあると結論した。

第52回膠原病研究会

日時 平成3年11月13日 (水)

午後6時～

場所 有壬記念館

I. 一般演題

1) 当科で経験したウェゲナー肉芽腫4症例の検討

佐伯 敬子・渡辺 武
伊藤 聡・上野 光博
佐藤健比呂・中野 正明
荒川 正昭 (新潟大学第二内科)

当科で経験致した WG 4例を呈示し、おもに腎病変と予後について、検討した。

症例1：72歳、女性。浸出性中耳炎と顔神経麻痺、上咽頭膨隆出現。腎機能低下、胸部X線異常影あり。ANCA 陽性。PSL と CY で治療を開始したが、敗血症によると思われる DIC を併発し死亡した。

症例2：61歳、女性。壊死性鼻炎、急速進行性腎炎、血痰。ANCA は未検。PSL, CY で治療し、一時腎機能は改善したが、その後低下し、3年後透析に導入した。

症例3：71歳、男性。維持透析中、鼻出血、血痰が出現、鞍鼻もあり、ANCA 陽性。PSL, CY で治療し、一時再燃したが、パルス療法を行い改善した。その後、DIC を併発したり、ANCA が再上昇し、注意深く観察中である。

症例4：64歳、女性。鼻出血、鞍鼻あり。軽度の蛋白尿あり、腎生検で巣状壊死性糸球体腎炎を認めたが、腎機能は正常、ANCA は陰性。CY, PSL で治療し尿所見は改善した。

考案：WG は、腎障害が出現してから診断されることが多いが、それではすでに進行していることも多く、耳鼻科症候が出現した時点で、検尿や ANCA を検索し、早期診断、治療にむすびつけることが必要と思われる。WG の腎病変は巣状壊死性糸球体腎炎が最も多く、ステロイドと免疫抑制薬の使用により、予後は改善されてきたが、一時的に腎機能が回復し、その後 WG の活動性は抑えられていても、慢性腎不全に移行して、透析導入しなければならない症例も多い。腎生検で間質病変、

糸球体硬化の強いものは、腎不全に移行し易いようである。WGの死因は、腎不全がへり、感染症がほとんどを占めている。寛解導入時の死亡が多く、免疫抑制薬、抗生剤の使い方の十分な検討が必要と思われる。

2) 慢性関節リウマチに伴う肺病変

野沢 悟・小澤 哲夫 (新潟県立瀬波病院
内科)
星野 賢一・山崎 秀清
石川 肇・中園 清
村澤 章 (同 整形外科)
鈴木 栄一・荒川 正昭 (新潟大学第二内科)

〔目的〕高分解能 CT を用いて、慢性関節リウマチ (RA) の肺病変を評価し、胸部単純 X 線像との比較検討を行う。

〔対象・方法〕1990年8月から1991年3月までに瀬波リウマチセンターに入院した RA 症例 176 例に、問診、胸部単純 X 線、精密呼吸機能および動脈血ガス分析で異常を認めた 74 例 (42%) に、肺高分解能 CT 検査を行った。

〔結果〕間質性病変、気道病変、胸膜病変は胸部単純 X 線と比べて、CT でより高率に認められた。間質性病変では線状・索状影が最も多くみられた。気道病変では通常の X 線像では検出できない細気管支炎を思わせる末梢粒状影が認められた。CT 像の主病変で分類した RA 患者の背景因子 (性別、年齢、罹患年数、病期、class) には差はなかったが、AaDO₂ は、病変なし群に比べて胸膜病変群に開大していた。

〔結語〕高分解能 CT は、RA の多彩な肺病変を評価するうえで有用であると考えられた。

II. 話題提供

Yersinia 感染症の細菌学と臨床

(膠原病、自己免疫性疾患との関連をも求めて)

新津医療センター内科

金沢 裕 先生

1972 年以来 *Yersinia* の検出につとめ *Y. enterocolitica* 人起病型 (*Y. e.*) 77 株と *Y. pseudotuberculosis* 3 株を検出した。

その検出率は幼児下痢症 15/487 (3.1%)、回腸末端炎 13/32 (41%)、虫垂炎うたがいで開腹切除された虫垂からは 28/637 (4.4%)、非感染性疾患開腹時切除虫垂からは 0/54 であった。Y 腸性虫垂炎例は年少者に、

軟便排出者に多く、また回腸末端炎または腸間膜リンパ節炎併発例が少なからずみられ虫垂炎の多くは軽症 (カタル性) であったが 1 例に穿孔がみとめられた。

一過性に軟便を伴い、*Y. e.* の分離された普通感冒様 2 症例、ペット犬からも同一菌型の *Y. e.* を検出した回腸末端炎の 1 例、遠足で谷川の水を飲んだエピソード後に風疹様発疹、高熱、腹痛で入院し *Y. p.* が分離された小学生例なども経験された。

結節性紅斑の 2 例から *Y. e.* が分離され、1 例には *Y. e.* 抗体の高度上昇があり計 3/13 に *Y. e.* 感染が証明された。うち頸部リンパ節の疼痛性腫脹を伴った *Y. e.* 分離の 1 部は分離菌に高感受性を示した TC で菌は陰転化してもなお継続する高熱に対しステロイド剤が著効を奏し Y 抗原に対する免疫学的機序の関与が強く推定された。

下痢腹痛のエピソード数日後に甲状腺の自発痛を訴えて来院した腺腫様甲状腺腫の主婦例に *Y. e.* 感染が検出された。甲状腺の濾胞の上皮細胞の細胞膜と *Y. e.* の細胞膜に共通抗原の存在が証明されており、自己免疫性甲状腺炎と *Y. e.* 感染との関係が注目されている今日、示唆にとむ症例であった。

サルコイドーシス (新大 2 内伊藤博士提供) 症例の 1/12 に人非病原性 *Y. e.* が検出されたが抗体価の上昇はみられなかった。

人動物分離株に reference 株を加えた *Y. e.* 70 株、*Y. p.* 24 株について化学療法剤感受性を検討し、両菌株とも AGs, CP, TC, SA, ST, キノロン剤には感受性を示した。 β -lactam 剤には *Y. e.* は耐性を *Y. p.* は感受性傾向を示しその差は β -lactamase 産生に関係することが判明した。

なお人、動物分離株には SM, SA, TC, 単独または多剤耐性株が *Y. e.* では 17% に、*Y. p.* では 28% にみられその一部には伝達性 R-plasmid の関与が証明された。

Y 感染症は各科に関連を有し、第一線の臨床上也ゆるがせにできない疾患と考えられ今後の研究の発展が期待される。

研究協力者

藤巻茂夫・長谷川健次郎・影山正歩・泉 外美・霜越信・田辺尚雄・森内正名・橋本芳孝・池村謙吾・重野直也・倉又利夫・久保 緑・市井吉三郎・伊藤慶夫